

卓越大学災害科学研究拠点キックオフシンポジウム報告（2017/11/27）

テーマ：災害科学の学際研究の推進と国際社会への貢献
 場所：仙台国際センター（宮城県仙台市青葉区）

平成 29 年 6 月に、本学は文部科学大臣から指定国立大学法人に指定されました。この指定国立大学とは、世界最高水準の教育研究活動の展開ができると、その実力と潜在能力を認められた国立大学になります。その活動の中で4つの世界トップレベル研究拠点の1つとして災害科学が選ばれ、そのキックオフシンポジウムが世界防災フォーラム/防災ダボス会議@仙台で、2017年11月27日（月）に環太平洋大学協会（APRU）と連携し共催されました。

自然災害は毎年世界各地に甚大な被害をもたらす、被害規模の拡大傾向の中災害リスクを軽減することは喫緊の課題となっています。そのため、東北大学での災害対応サイクル理論を適用し、学際連携を基盤とした「災害科学」の学問研究領域を創成するための研究拠点が形成されました。今後、APRU、国際機関・組織、海外拠点大学と災害科学に関する研究ネットワークを発展させ、国際共同研究の強化や国際学術会議の開催を通じて「災害科学」の体系化を図ります。

このシンポジウムでは、冒頭に東北大学の里見進総長から指定国立大学と研究拠点についての説明があり、文部科学省学術研究調整官 錦泰司氏、APRU 事務局長 Christopher Tremewan 氏より東北大学への抱負と期待が述べられ、今村文彦拠点長（世界防災フォーラム実行委員長、災害科学国際研究所長）から、災害科学研究拠点の目的と概要さらに現在の活動についての説明がありました。拠点の新しいロゴも披露されました。引き続きのパネルディスカッションでは、David Alexander 教授（ロンドン大学）、Fatma Lestari 教授（インドネシア大学）、高倉浩樹教授（東北アジア研究センター長）、Gwendolyn Pang 氏（国際赤十字赤新月社連盟）らを招いた議論が行われました。学際研究からの貢献として、異なるステークホルダー間での連携や災害に強い社会構築への期待が寄せられました。また、災害からの復興には物理的な状況だけでなく、地域や精神・文化の回復が不可欠であり、学際的な研究の重要性も指摘されました。閉会で総括を行った早坂忠裕教授（前東北大学理学研究科長）は、「災害科学の国際コラボレーションを一層推進していく。」と締めくくりました。このシンポジウムには、学内外から168名の参加がありました。

4日間開催された世界防災フォーラムへは、40カ国以上、約930名の参加があり、さらに、同時に同時開催の防災推進国民大会（ぼうさいこくたい）、防災産業展を合わせた全体延べ数は11,200名を越えました。



里見進総長からのご挨拶



シンポで披露された拠点のロゴ



160名を超える参加があったシンポジウム会場の様子



登壇者や関係者の集合写真